

学生のレポートにみるソ連史観

木村 英 亮

How Students Look at the History of the Soviet Union

Hidesuke KIMURA

はじめに

私語が多いとか、勉強をしないと聞いた学生に対する批判は、ようやく大学教員に対する批判へと進んできており、亜細亜大学、慶応大学などでは講義に対する学生の評価とか、自己評価の導入とかが具体化しつつあるようである。

私は20数年、横浜国立大学のほかいくつかの大学で講義や演習をもってきたが、学生の質や態度は全体としては昔からあまり変わっていないと思う。学生は、日本社会のなかではもっとも知識の高い層であり、研究に対する態度も素直である。おそらく学生を説得できないような論理は、社会においても通用しないと考えるべきであろう。『朝日新聞』夕刊のコラム「窓、論説委員室から」に、「大学で知った若者たちは、意外にまっとうで、一部を除き知的レベルも低くはない。レポートを読んでも、彼らなりに悩み、考えているのがわかる」(智, 92.2.4)とあったが、まったく同感である。また他大学の教授から、荒れ野にむかって空しく響くように反応がなかったことを反省し、講義に全力投球しているという話を聞いたことがある。たしかに反応がないときは、講義の方にも問題があると考えべきであろう。

レポートや発言などに表現される学生の意見は、世論と同じく、新聞、雑誌、テレビの報道・論評に大きく左右され、またわれわれの講義内容にも影響を受けるが、しかし、そのなかにもおのずから学生自身の見方がでるものであり、青年の見方が分かると同時に、気付かなかった視点を得ることもある。

最近、日本社会全体として権威に対する感じ方によりやく変化の兆しがあり、比較的自由に考えを表明するようになったが、これはとくに青年にはいちじるしいようである。学生の場合、社会人に比べ、どちらかという理論的関心が強く、権威に対して無関心のところがあることが、特徴であろう。

去年はソ連に大きな激動があり、また私がソ連の歴史の概説を出した機会でもあったので、私の本『ソ連の歴史』(山川出版社, 1991)を参考書とするレポートを課した。全体として、よく聞き取り、読みとって、自分の言葉で表現していると思う。私の本ばかりでなく、他の論者のソ連論などを読んで、その影響をうけたものもあるが、それなりに学生の共感を得、その意見を反映しているものと考えられる。

本稿は、いまの学生のソ連史観を知るための資料として、そのレポートの一部を抜粋

し、テーマ別に整理してみたものである。すっきりと分類しきれないので、かなりおおざっぱな分けかたになっており、アトラランダムな配列になったことを、はじめにお断りしたい。

文末の略号は、教＝横浜国立大学教育学部、経＝同経済学部、営＝同経営学部、工＝同工学部、専＝専修大学文学部、大部分は1年次の学生である。

全体的な感想

人々は、自らの行動によって、その意図とは離れた方向に進むことがある。だからといって、それは、行動と意図の価値を否定するのに十分な理由にはならない。ソビエトが歩んできた道にも、そのことが当然いえる。どのような道をとおり、どのような選択を行い、どのような必然性があったため、そうしたことがあったかを追究することが、彼らへの理解をよりいっそう深いものにすると思われる。(教 YY)

ソ連を論ずるとき、評価を相対化し多元化することが必要であろうと思う。つまり、たとえば、「もっともすばらしい国アメリカ」を絶対的尺度として、ソ連を判断するといった視点を捨てることである。(工 FE)

私もまた著者と同様に、ソ連の行き詰まりの原因は、官僚体制の腐敗ではないかと思っている。…このことは、ドイツの哲学者ハーバーマスがいうように、「システムが生活世界を植民地化」してしまっている状態を示しているといえるだろう。ソ連の人々の生活感覚からすれば、巨大化した国家機構、官僚体制と自分たちの日常生活とは全く遊離し、システムと生活世界の分断が、人々の労働意欲を失わせていった、という見方もできるのではないだろうか。本書においては、マルクス・レーニンの理論が忠実に実行されていれば、事はもっとうまくいくのでは、といった意見として筆者の主張をうけとめた。それに対しては、私はむしろ、人々の生活世界とシステムとの関係から見るべきではないか、と思う。(教 HK)

物質的資源において、また、軍備において、勝ち目はつねに相手側にあったのであって、革命の偉業は、革命がこれらの明らかに圧倒的に不利にもかかわらずその権力を樹立したということであった。…トロツキーは、西ヨーロッパの諸条件の研究から引き出されたマルクス主義の図式をロシアに適用するさいに内在する困難を、どの革命的指導者よりも早く見たのであった。(教 UT)

解放運動は革命により決着がついたようにも思われるが、真の解放はペレストロイカ以後ではないかと思う。(工 HE)

鉄道が好きだった私は世界最長の鉄道であるシベリア鉄道に魅せられ、ソ連に興味をもつようになった。別に社会主義に興味があったわけではない。しかしこのいささか安易である理由からソ連に入ったおかげで、かなり客観的に(たいていの日本人がもっているソ連に対する嫌悪感を持たずに)ソ連を見ることができるようになると思う。(どちらかと言えば好意的に感じている面があるかも知れない)(専 MK)

指導者に要求されるのはおよそ「権力」ではない。「権威」であると信ずる。我が国のように政治と経済の歯車が別個に回転している国は希である。ロシアにせよ旧ソ連に

せよ政治は経済、即ち国民の生き死にと表裏一体なのだ。…ソビエトはゴルバチョフによって解体された。しかし彼はいわば「リレーのアンカー」にすぎない。歴史的運命はスターリンの頃に決していたようにさえ思われる。その意味ではフルシチョフもゴルバチョフも途中走者であったのであろう。彼らにそのような意識があったとは到底考えられないことであるが、いずれにしても両指導者は権威者ではなかったように思われるのである。最後に、「作家」ソルジェニーツィンは1967年5月、あらゆる検閲の廃止を訴え、中傷並びに不当な迫害にさらされた作家に保証を要求する旨の公開状を発表したが、その中の一節を記しておきたい。彼が作家としての「権力」でなく「権威」をもっていたということが皮肉にも理解できたのは私だけだろうか。「真実にむかう道を阻むことは誰にもできないことであるし、その行動のためには、私は死をも受け入れる勇気がある。」(ソルジェニーツィン「礼賛」、権力と権威に関する一考察、教H.S)

本書では、連邦の結成から崩壊までの約70年間に実によく細かに記しており、これまであまり知らされなかった、世界最大の社会主義国家のたどった道筋を理解することができた。このような密な歴史書を読むと、歴史というのがいかに総合的学問であるかということをつくづく感じさせられる。その国の民族、文化、言語、産業、気候、宗教、地理などが複雑にからみ合い、歴史を織りなしていく。それぞれの要素はそれ自体が一つの学問となりうる程奥深いものであるが、それと同等のものがさらにいくつも存在し関連しあうのである。そして歴史学をそこまで深く掘り下げることができた時、それまでの表面的な学習では単なる偶然の連続にしかみえなかったものが、実はそれぞれの要素が複雑に影響しあい起きるべくして起きたすなわち必然的なものであったと認識されるのである。少々話がそれるようだが、さきの湾岸戦争の際のマスコミの態度は、この点で実に粗雑であったといえよう。

現在のソ連情勢に対するマスコミの一部にも同じことがいえるのではないか。歴史の断片だけをとりだし表面的な結果論だけで「社会主義の敗北、限界」などと声高に叫んでいる。歴史とは「点」の集まりではない。まず最初にそこには人が存在し、その人々が常に現在進行形で活動し、そしてそれが蓄積していったものが「歴史」である。したがってそれは自然「流れ」となる。個々の事件はその「流れ」の中の一点にしかすぎない。実にあたり前のことではあるが、一点だけ見て総てを語ろうとする傾向があることも事実だ。そのような見地から批判を下すのは簡単なことである。しかし、そこからは何も生まれてこない。「歴史」の一要素一要素に目をくばり偏見のない総合的な見地からのぞんでこそ、歴史学が成り立つのである。(専T.T)

ソ連社会主義の評価

ソ連の歴史とは、ロシア革命によってレーニンが社会主義の基礎をつくり、スターリンがその上に社会主義を築き、スターリンの死後、彼が残した遺物をどう現代的にリフォームしていくか、建物を倒さぬようにしながら、新しい形に変化させていくかを検討し、改革を進めていっているように思う。(教KH)

スターリンが戦争に関しては有能であったと書いてあるが、2700万人の戦死者をだし

で有能といえるのか。日本の人口の4分の1というとても少ない数である。これをみて、なぜか強い憤りを感じた。…チェルノブイリ事故当時自分は中学生だったがこれに関してソ連だから、社会主義だから起こってもしようがないと思ったものである。(工KT)

ソ連は来るべき戦争のため一時社会主義の大義を棚上げし、独ソ不可侵条約を結んだ。このことからスターリンは理論に固執するあまりに自らに不利益をもたらすような人間でなかったことが分かる。…8月9日私の誕生日の日には毎年、朝は長崎で原爆の黙祷があり、前後の日には「反ソデー」として街を右翼の街宣車が走り回る。去年は真珠湾から50年ということもあり、これら戦争中のことが、いろいろと取りざたされた。そのほとんどは感情的で何か気にさわるものを感じる。日本が「してしまったこと」、「されたこと」そのどちらも冷静に考え、過ちを詫び、求めるものは求めることが、今後の旧ソ連あるいは諸国との関係のためにも大事かと思う。(工SM)

「独裁官僚体制」のもとで、ゆがんだ社会主義である「疑似社会主義」が実現されていたのである。…今世紀初頭から1世紀にわたって、先進資本主義諸国において実践され続けてきた社会民主主義にこそ社会主義の理念が生き続けているように思う。(教GN)

ソ連の最大の過ちは、民衆の力によってできたにもかかわらず、民衆を救うことが最優先ではなくなってきたことだと思う。とくにスターリンの過ちは、今のソ連をすでに決定していたような気がする。ソ連の社会主義はある程度成果をあげたかもしれないが、アメリカとの対立に力をそそぎすぎて根元を失ってしまったのだ。(工SM)

ソ連崩壊の理由としては、マルクスの唱えたものといくつかの点で違っていたことが、70年以上の年月の流れの内に、みずから崩壊に導いたのかもしれないし、マルクスの理論自体が間違っていたのかもしれない。(工YK)

社会主義は、気体を理想気体とみなし、その上で成り立つ状態方程式のようなもので、人間の欲、個人差、人格など、総てが無視できると考えた上ではじめて成立する、人間界における状態方程式のようなものである。それは現実の世界では不可能なものである。(工WM)

社会主義が彼ら独裁者によって生み出されたばかりに、悪い印象を背負う運命になるとは、マルクスは予想もしなかっただろう。(経UK)

もし真実の意味での社会主義の世界があるのなら、それこそ『ガリバー旅行記』の馬の国だ。人間が欲とねたみを持たない生物なら可能な世界なのだが。(専OK)

社会主義経済の体制は指導者と労働者に共通の目的意識があるときには有効な体制だと思う。ソ連を短期間で工業化し、第二次大戦を勝利に導く基礎をつくったことは最大の成果である。だが共通の目的意識のない中央集権化された指導組織の存在は、指導され、働かねばならない人々にとって重荷になるだけだと思う。本当に平等な社会なら同じ目的にしたがって計画的に経済活動を行っていくことが非常時でなくてもできたかもしれない。しかし、それができなかったということは社会主義の体制は人々の望んだ体制とはちがうものだったからではないだろうか。(専FK)

一人の人間にすべての失敗の責任を押しつけるという体質を改善しない限り発展は望

めないのではないかと思います。(専SY)

現在社会主義（ここではマルクス主義のこと）をまがりなりにも採用している国で「うらやましい」と思える国があるのでしょうか。…何主義であれ、衣食住とゆとりがある国ならいいのだと思います。(専AM)

レーニンの革命理論が、このような理論が陥りやすい教条化を避けえたのは、やはり背後に、非常に優れた経済分析があったからであろう。そして、その経済分析の根幹をなしていたのが、資本主義批判である。その偉大なる業績は、たとえ地球上から社会主義国家が消滅したとしても、不変のものである。(経SY)

社会主義は失敗した、と思われがちであるが、必ずしもそうはいえない。資本主義社会における歪みもこれからさらに表面化すると考えられる。また、逆にソ連にこだわらずに、社会主義を見直すときがきた、とも考えられると思う。ここへきて世界は、真に人間らしいとはどういう状況か、新たに考え直す必要をせまられている、といえるであろう。(教NY)

社会主義は景気に左右されないという資本主義にはない利点を持っている。異なる2つの経済体制が存在することにより相互の利点・欠点を生かしてその長所を伸ばすことができるのではないかと思います。(工HT)

資本主義国家のように、少し表現が悪いかもしれないが、「相手を蹴散らしてでも自分の利益を追求する」といった形の競争意識ではなく、共同体全体として一つの組織の中で自分の役割を少しでも効率よく行って共同体全体の利益を追求する、そのためには同種の役割をもった者同士、協力し合いながら互いに競争をする、といったものなのだと思う。(工HT)

もともと社会主義は競争そのものを否定したものではなく野蛮でない人間的な形態で組織しようというものであったはずである。これほどまでに強制がなければやっていけなかったのだろうか。(経NK)

生まれたときからこれといった不満もなく、平和な世の中に生きてきた僕らにとっては、「社会主義」について考えてみる機会は何にもない。(教NH)

平等主義は「マイナス」と考えられる側面ももっていたような気がします。思想や文化の多くの領域で、その水準は、大多数の労働者・農民の要求や心理状態にあわせて引き下げられざるをえなかったのです。また、少数の知識人がロシア文化の担い手であった時代に特徴的であった西ヨーロッパの思想界の動向に対する敏感な反応なども失われたのです。(工NS)

僕の印象では、自由と平等の根本的な2つの権利のうち、どちらを中心に考えてきたかだと思います。だから、社会主義は平等を中心に考えていき、その度がすぎて、独裁者に利用されたと考えています。よって、平等、自由、その中間ぐらいい向かって世界の国々は動いて行くような気がします。(工TT)

発展途上国では、社会主義の概念を、社会正義もしくは反権力と同義語とし、ナショナリズムと一体化して用いることが多いようである。つまり、民族が他国の支配からの解放を求めることは自由主義の発現であり、民族の政治的運命を民族の成員が自ら決定

するのは民主主義の発現である。そして、運動が大衆を動員する時には社会主義的な政策内容を帯びることが多いのだ。(教KK)

革命とレーニン

革命は怒りある所に生まれる。怒りのない革命など存在し得ない。20世紀初頭のロシアは噴火直前の火山のマグマのように民衆の怒りが高まっていた。(教FS)

ニコライ二世は、これまで歴史に登場した数々の独裁者と同様、時代の流れを読み取れず、利己的な性格であったために、自ら滅んでいったのではないだろうか。(教CM)

「最も遅れた大衆」にしてみれば現在の支配階級のせいでもたらされている、貧困や飢えから逃れられればそれでいいわけで、革命後にどんな主義主張の人間達が支配階級に立つかまでは考えない人間が大多数を占めたまま革命がスタートし、その混乱時に上手く世論を味方につけた者を革命後に支配階級に立ててしまうという怖さを感じた。…結局平和を求める人民の要求に応えたボリシェビキが十月革命によって国家権力を得たわけだ。もしこの時に世論に応えられたのが、ヒトラーのようなとんでもない人間だったとすると(実際、ヒトラーって確か最初のうちは社会主義掲げて選挙に出てきて多数を占めるようになってから意図的にあんなになったんでしたよね?)、歴史は全然変わっていたわけで、それを考えると、物事の勢いというのは恐ろしいと思う。…社会主義は結局理想論でしかないのではないだろうか。先日、TVでビートたけしと坂本龍一の対談を放映していたのだが、その中でたけしが、「レーニンの言っていることを読むと、全部正しいし、何一つ間違ったことは言っていないんだけど、人間がそれにそって生きられるかっていえばそれはできない。社会主義をもてあましちゃう人間の負けなんだ」といった内容の話をしていたのだが、この本を読んでたけしの言ってる事が何となく見えてきた気がした。(工TT)

人々は確かに帝政の圧政に苦しんでいたが、彼らの望んでいたものは日々の暮らしの改善と自分の意見が反映する社会と人権を望んでいるにすぎないと思う。そこに理想に燃える指導者が出現したので、それについていったと思うのだ。人類の国家や社会は理論がなくても存在した。そこに、社会を分析する学問が生まれ、分析し、体系化した理論が生まれた。それを国家や社会に当てはめようとした初めての試みの最初の一步が社会主義革命であり、この点において意義は大きいと思う。(工SA)

自分の力を前面に出すのではなく、あなたたち一人一人の力で革命を成功させたのだということを強調して、うまく民衆の士気を高めている。このあたりの人の動かし方はとてもうまい。…彼は、権力奪取することよりもその後のことに重点をおき、今自分たちの国には何が必要なのか、何をしなければならないのか、その為にはどのような政策でいけばよいのかということを第一に考えた。…その政策に同意して人々が動くから結束が固く、大きな力を生みだすようになった。レーニンは、必ず公約を守ってそれらの政策を実行した。こういうことができるのは、本当に民衆のことを考えていたからできるのであって、自分が権力をにぎることを第一に考えている人間にはできないことだろう。(教IK)

本の中に「全人民的な視野に立った理論、自然発生性ではなく目的意識性が重要である」というレーニンの言葉がある。確かにレーニンはこの通りに行動したと思われるが、僕は、やはり、自然発生的に出てきたものが民衆の意見であり考えであって、勿論、ただそれだけでは無謀であるが、それについて目的意識を持ち、方向を鮮明にすることによって、全人民的な理論に還元されるのではないかと思う。レーニンの考え方では、やはり、「上からの改革」として、とらえられるのではないだろうか。(経KT)

革命における労働者階級の任務は、ブルジョア国家を打倒し、それまでの人間の搾取にもとづく支配ではなく、人民の圧倒的大多数の利益のために力を行使するような国家にとりかえることであり、このような国家のことをレーニンはマルクスの用語にしたがって、「プロレタリアートの独裁、つまり抑圧者を打破するための、支配階級としての被抑圧者の前衛の組織」と呼んだ。…レーニンは、社会主義なしには真の民主主義はありえないと考えていた。社会主義は、人間のエネルギーが浪費されたり、人間の努力が無駄になったり誤用されたりしない合理的な社会組織である、というのが彼の考えであった。(工OK)

社会主義なしには真の民主主義はありえないという意見をのべた人は、レーニン以前にもたくさんある。だが、レーニンは、その逆のこと、つまり、民主主義なしには社会主義もありえないと主張した。なぜなら、…勝利した社会主義は、完全な民主主義をうちたてないかぎり、その勝利をもちこたえて、国家の衰滅する段階まで人類をみちびくことができないからである。(教KT)

革命の歴史は時間的推移から2つに区分される。1917年2月から夏までの時期には、大衆は、指導者を変えればそれまでの政策の変更をもたらす事ができ、二月革命の精神に立ち返ることができるという希望を未だ捨てずにいたため様々の政治的解決が可能であると思われていた。夏にクーデターがあった後、民衆は政権を委ねた党と人間とに絶望し、彼らに背を向けて、求心的な解決方法を求めた。それがボリシェビキつまるところレーニンの意志がみごとに民衆の熱望と合致し、革命が成功し、ソビエト国家が生まれた。(経OY)

党の多数者ではなかったにせよ、実力を有する少数のものは、メンシェヴィキや社会革命党員が共に熱烈に支持していた見解、すなわち革命はまだ完全にそのブルジョア的段階を完成しておらず、従って、社会主義への移行はなおさら早いという見解に明らかに固執していたように思われる。この見解に立つならば、十月革命は二月革命のたんなる継続と深化にすぎず、原理においても目的においても二月革命と異ならないものとなるのであった。この見解に立つならば、民主主義革命の最大の成果である憲法制定議会に期待するのは正当なことであった。(工KK)

私の「革命」という事件に対するこれまでの印象は、民衆などの被支配層の力によりその国や地域の未来が開かれていくというどちらかといえば明るいものであったが、この本を読んでみて革命というものは、その国が政治に行きづまることにより苦しめられた被支配層が協力し、たくさんの血を流すことにより達成されるものだと感じた。(専US)

ロシア革命の一つの特徴は、革命の年月と成果の持続性、もう一つのより重要な特徴は、正統性の完全更改である。(営 IK)

人類未踏の社会主義権力として見るより、西欧の市民革命後の政治権力と同じような任務を遂行しなければならない権力として見る方が理解しやすいと考えられる。…1917年のロシア革命は、都市のプロレタリアによる政治権力の奪取と、農村における共同体農民による総割替運動の全面的勝利という、運動の性格も構成要素もまったく異なる2つの革命の複合的構成をなしていた。この2つの革命は二重であり、また平行だった。もちろん農村での総割替運動が思いのままに振るまえたのは、都市でのプロレタリア権力が、ツァーリの軍隊を解体し、農村に派遣することをできなくしたからであり、また都市でのプロレタリア権力が世界の帝国主義を相手にした内戦期を通して政治権力を維持できたのは、広大な農村を戦場とした戦闘で、陰に陽に農民がプロレタリア軍隊を支持し、支援し、自らも戦闘に参加したからである。二重革命の相互依存は存在する。だがこの2つの革命は、その歴史的性格において異なっていたばかりか、反対の性格すらもっていたのである。(教 IM)

第一次大戦に始まる「国家の時代」を対照的にながめた2人、ブハーリンとレーニンの国家論を見て、最初に気付くのは、この国家の時代を前者は恐怖をもって見ているのに対し、後者は希望の接近とみなしている点である。国家の時代における革命としてロシア革命を見直し、2人の国家論を比べてみたい。(工 MN)

レーニンの像をとり払う映像を何回か見た。人々は喜び、拍手や口笛が飛び交う。それは民主化への儀式のように感じた。個人崇拜を嫌っていたレーニンなら、喜こんでいるだろう。しかし、もしその儀式が、レーニンや社会主義に対する怒りから起きた事だったなら、まずいのではないだろうかと少し不安を感じたのである。(専 NM)

この当時の資本主義が生み出す害悪を克服する方法を、探しつづける中で生まれて来たのが社会主義である。ロシアに革命がおこり、その後の困難にもかかわらず、明らかに大きな達成が成されたのである。(工 CE)

スターリン体制 1

世界が暗黒に包まれている時は、人の心も暗黒に包まれ、ヒトラーもその一人であると思われる。スターリンはもしかするとその闇に飲み込まれた犠牲者であったのかも知れない。この時代、特に戦中に限らず、20世紀という時代は最も人間の悪の部分がふき出た時代であったように思われる。人類にとってこれほどの悲劇は今までなかったであろう。スターリンはそれを表した代表であろう。今私たちは平和な世界において、当時のことを振り返り、独裁の恐ろしさ、戦争の恐ろしさを学ぶことができる。2度と繰り返してはいけないと人類がその恐ろしさを知るための必要悪であったのではないだろうか。(教 SY)

スターリンは、私の持っている印象の限りにおいて、ソ連の黒い部分をそのまま凝縮したような存在である。(工 TS)

私はスターリンの心理状態に何らかの異常があったように思えてならない。権力に対

する飽くなき欲望，そして究極的な人間不信。そこに私は，あのヒトラーとの共通点を見出だす。エーリッヒ・フロム言葉を借りれば，マゾヒズムとサディズムという2つの顔をもつ，「権威主義的人間」としての共通項。しかしながら粛清の原因を一概に，いわゆる「精神病説」に依拠し，スターリン批判に諸手をあげて賛成する訳にはいかないであろう。何故なら「権威主義」的側面は全ての人間が少なからず有する性格の一つであり，また，スターリンの社会主義国家建設に対する激しい情熱にもある種の同情を感じずにはいられないからである。そして粛清という行為自体に関しても，犠牲者に対する同情だけでは割り切れない。その多数を占める共産主義者，軍人らは，それ以前に，多くの農民，労働者を「赤色テロル」で殺害しているのである。…私にはどうのこうの言える自信がないのだが，ただ過去の事実，歴史上の真実だけは忘れてはならないと思う。(教ST)

僕はスターリンが何を行い，何を言明したかが，きわめて重要だと思う。彼の言動は必ずしも筋道立ったものではなかったが，少なくとも，行動は一貫していた。一方，彼の言葉は，揺れ動く願望と恐怖をよく表していた。それらの言葉は非現実的で分別に欠けていたかもしれないが，彼の政策決定をうながした原動力であり，それはどうしても理解しなければならないものである。そんなわけで，僕はスターリンが，この全期間を通じて，1917年のケレンスキー臨時政府の崩壊と同じように，突如としてソビエト政権が内部崩壊するのではないかと，との恐怖を実際に抱き続けていた証拠があると思う。ソ連の一般大衆はあまりに弱く，ソビエト国家の警察力はあまりに強大だったので，そのような可能性は実際には小さかったとみてよいだろう。だが，問題は，そうした恐怖の妥当性ではなく，それが存在したことであり，それが引き起こした反応なのである。…スターリンは自分とヒトラーとの利害がいかにより一致したかを知るだけの判断力は備えていたが，その同盟がいかに危険なものであるかを見抜けなかった。ヒトラーとの条約が熱烈に歓迎されたのに対し，その後の英米との戦時同盟が恐怖と疑惑をもって受けとめられたことは，すべての証拠が示している。スターリンの主要な関心が国内の安定にあったことが分かれば，こうした点も完全に理解できる。(工TS)

スターリンは崩れかかった一帝国の南部の寒村で貧困のうちに生まれ育ちながら，チムールやジンギスカンの時代以来初めてヨーロッパを威圧し，東洋を脅かす権力をふるい，世界最強の男として死んだ。彼は単に権力を手にしたばかりでなく，マキャベリやタレーランが称賛するようなやり方でそれを保持したのである。スターリンは天才的な政治的才能を持ち，生得の能力に加えて，貧乏人特有の無限の忍耐力をもあわせもっていた。着実に出世の階段を上がって行く過程で，スターリンは決して己れを過信して図に乗るようなことはせず，政敵を性急に処分しようとしたり，虚栄のために己れの判断を曇らされるようなことはなかった。こんにちにおいても依然として彼は無気味で神話的な威光を放っており，それ故にまだにソビエト文化における最も強大な人物となっているのである。…もしスターリンが自国文化の本質に逆らったなら，彼は決して成功しえなかっただろう。彼は幾世紀ものあいだその文化のなかに存在していた様々の方面の力を利用したのである。…スターリンはテロや独裁的権力を承認する適応力，さらには

それを享受さえする適応力を引きだすのに異常に熟達していた。こうしたテロや独裁的権力は決して1930年代のソビエト国民に特有のものではないのである。(工SD)

「諸民族統一主義」のような考えは、決して生まれながらの貴族ら上流階級の者には思いつきもしないことである。彼が泥まみれの民衆のなかで育ち、非凡な才覚に恵まれていたからこそ生まれた主張だし、起こせた行動なのだろう。彼は体験から、民衆の中にある爆発せんばかりの民族主義的感情は、人民大衆に訴え動かす力を秘めていることを感じとっていたに違いない。それに、ソ連の統一を守りつつ指導を徹底するためには、まずロシア民族主義に訴えることが最も効果的であることをよくわかっていたことだろう。…ひとつははっきりいえるのは、現在の日本の政界にあるような単なる権力欲だけで彼は動いていたのではないということだ。(教MM)

ピョートル一世が、欧米などで絶対的な力をもつ宗教についても自分の権力内において民衆を支配したことなどもロシアの拡大に役買っていると思われる。なにしろ民衆の心をつかむには金などの物質的なものよりも、宗教などの精神的なものの方がはるかにいいに決まっているからだ。スターリンがこれら2人の皇帝を参考にしたのもうなずける話だ。(宮KK)

スターリンを「孤独な独裁者」という人が多いが私はそうは思わない。確かに彼は多くの人々の犠牲の上に立った悪意に満ちた独裁者だった。が、しかし、第二次世界大戦等、当時の難局を乗り切る為には彼のような冷静にそして正確に状況を判断して決断を下すことのできる現実的指導者を必要としていたからこそ議会は彼に従い、民衆は彼を支持したのではないだろうか。彼の政治は決して正しいものではなかった。が、時代のニーズに答えていたことは確かなのではないか。…スターリンは強大な力を求めて時の流れを見定めてスターリン体制を築き上げた。が同時にそれは他の指導者にとっても座り心地の良いものであったのだろう。が、しかしスターリン体制はゴルバチョフによって打破された。私は彼の現実と戦う勇氣に敬意を表したい。(宮EK)

彼の写真をみると全て自信満々で誇りに満ちている。決して好きな政治家ではないが、興味深い人物である。ソ連という国家は失われたが、彼の存在は忘れられることはないであろう。(教IY)

藤井一行は、民族問題に関してスターリンは「ソヴェト諸共和国の真の統合」か「各共和国の真の独立」かであると言い、「階級問題か民族問題か」という考えを持ち、トロツキーは「階級的原則は民族自決を排除するものではなくて、逆にそれを包摂するものである」とし、レーニンの遺志を継ぐのはトロツキーであって、スターリンではないとする。しかし現実の勝利者はスターリンであった。様々な意味でスターリンの方が上だったのであろう。しかし、このような考えをもった人物がソ連初期の指導者だったことが、既に今日のソ連崩壊の火種だったのかもしれない。レーニンは自分の後任をトロツキーにする気だったようだが、トロツキーは自分がユダヤ人である事を理由に断っている。こちら辺にも私達日本人にはわかりづらい民族問題が含まれる気がする。…異常なまでの大粛清は、ロイ・メドベージェフ、早野泰三によれば、精神病といった類のものではなく、法外な権力欲と虚栄心が引き起こしたとされる。…スターリンについて、た

いていどの本も批判的であった。その中で『ソ連の歴史』はかなりスターリンを擁護しているように思われた。自分としては良かれ悪かれ後進国ロシアから大国ソ連になり得たのは、スターリンの力が大きかったものと思える。(経 NS)

大粛清は非常に恐ろしいと思います。「だけど、だけど、なぜだ」という言葉には、ぞーとするものがあり、スターリンに人間の恐ろしい一面を見たような気がしました。(専 HH)

人の心を無理矢理変えようとしたことに対しては嫌悪を覚える。しかし、その「無理矢理」がもしかしたら、あの当時のソ連にとって最善の策だったのかもしれないと考え、スターリンこそがソ連の危機を最小限でくい止めた人物ということになる。スターリンだって、自分の国や国民をただ単に苦しめて、自分の思い通りにしようと思ったわけではないと思う。(専 HM)

スターリンは計画の定める遠い目標に到達するために、労働者の善意にいささかも期待せず、自発的な飛躍などはなおさら当てにしていなかったであろう。彼自身が工業主義的傾向に反対しすぎていて、その点について大きな幻想などもっていなかったのだ。彼の公開の楽観的なことばは、約束ばかりにうんざりしたプロレタリアートの大部分も、生来疑い深く経験によって敵対的になった農民大衆の全体もだませなかったが、青年層の大部分を籠絡することはできた。…極端から極端に、慎重から無鉄砲に変わって、彼はレーニンの一句を思い出し、自己正当化の自在鍵に使い、でたらめ極まる行きすぎの言い訳にする。「根底は絶対に科学的な、いつわりのない活気のある展望、10年から20年にわたる大計画で、自覚した労働者農民を感動させなければならない」というのである。だが、卑劣な人工手段で惹き起こされるか勧告される労働の喜びなど、疲れ果てたプロレタリアートも疑い深い農民もとらえられるわけはなく、低賃金で競い合う「突撃隊」の辛苦も、物質の不備、技術の遅れ、職業的な無能力を埋めあわせるわけがなかった。スターリンは性向からも、自分の体制の論理からも等しく、苛酷な諸処置で障害を碎かざるをえなくなったのである。(経 NS)

スターリンは西欧派ではなく、マルクス主義を西欧批判の原理として受け取った。スターリンの革命は自由化のない工業化であるといえる。スターリンはソ連の地位を世界の超大国にまで高めた。彼は抑圧によっておびたしい人の命を奪いながら、暗殺されることなく、死を遂げた。(教 IY)

僕は、スターリンという男は、内務省の手先であり、情報提供の見返りに党大会への旅費をもらい脱走できたといったうわさがあるにしても、並の精神の強さでなく、ただでは転ばず、世の中で何かを必ずしようという意気込みのあるすごい人間だと思った。そして、こういう人間だからこそ、人望があるのだと思う。(営 TK)

あまりに改革が急で、あまりに独裁的であったために国民がついてこれなかった点は認めざるを得ないが、ソ連を短期間で工業化し、「大国」にする必要があったこの時期ではやむを得なかったのだ。私はこの点で織田信長と共通点を感じる。彼は信長と同じく急速な改革によって時代を変えた。しかし、あまりに急速な変化であったがゆえに、今日にひずみが来ている。(教 HH)

スターリンをスターリンたらしめたロシヤ・ナロード（民衆・人民・国民）のなかにスターリンをあらためて置いてみることに、そして何よりもまず生身のナロードの現在と将来を自分のこととして問うこと、そのためにはロシヤの過去へ遡及すること「スターリン時代」にかんして僕が関心を示すのはだいたい以上のようなわけであります。…バリ・コミューンの思想を正直に生きて革命の初心を問い続けたクロンシタットの水兵たちは、1921年の3月18日ソビエト権力によって有無をいわず潰滅させられたのです。クロンシタットの反乱弾圧に関しては、レーニンもトロツキーもスターリンも声を同じくしたのであります。…スターリン時代の成立にレーニン、トロツキーらが寄与したことは疑えません。…まず名があり、それに内実が従ったというのが「スターリン」という名の歴史であります。…マルクス主義は反逆の教えとしてロシヤに入ってきました。この反逆の教えを支配の教えに変えるという理論的にきわめて困難な作業をロシヤ・マルクス主義者はやってのけなければならなかったのです。彼らはナロードみずからが支配者であるという「意識」を作りあげることでそこを突破しようとしたのです。（工YK）

なぜスターリンが、一見無茶と思われる手段をとったのかというと、レーニンの理論だけでは無理な点もあったからではなかろうか。（宮NY）

当時の世界情勢を見ると、トロツキーがソヴィエト政権の最高権力者であったならば社会主義建設のスタートはきれなかったか、あるいは、ずい分と先送りになっていたであろう。しかし、スターリンがマルクス主義の名を汚したのは事実である。スターリンがソヴィエト政権を、真の社会主義とは似ても似つかぬ方向へと導いたのである。（経YY）

本を読んでいて率直に思ったり感じたりしたことは（少々ばかばかしいかもしれないが）、スターリンという今まで偉大な人というイメージしかもっていなかった人がただふつうの庶民として生まれたことに驚いたし、又、革命中や現在のソ連でパン屋に行列ができ、ケンカになるという食糧困難のことは、今の日本国内の状況から考えつかないし、想像すらできないことだ。（工OG）

僕がこの本を読んでまず思ったことは混乱した時代に大して罪もない（あるいは全く罪のない）人々が裁判という正義の下に数えきれないほど殺されているということだ。何か忠告しただけで反逆罪等の汚名を着せられ追放されたり流刑になったりしている。とくにスターリンの頃はすさまじくこのころの政治家はスターリンに付和雷同する位しか出来なかったのではないかと思う。社会主義とはそんなものかという思いが頭をよぎる。社会主義の基本が階級の廃止、生産手段の公有等の他に言論出版の自由などを含んでいるとすれば、スターリンの行った粛清などはもってのほかである。…しかしスターリンが粛清を実行したのはあながちまちがいはないと思う。当時の世界の時代背景を考えれば社会主義が生き残れる取るべき道は少なかったに違いない。…その当時アメリカやイギリスは帝国主義といっても良いしドイツにはナチズムがはびこっていた。今の平和なときと比べればソ連を虎視たんたんと狙う敵が数多くいたのだ。内部統制を徹底しなければ各国につけいれられたであろう。平和な今となってみれば当時の政治体制は非難されて当然である。しかしそのような政治体制を取っていた国は周りに多くあった。

日本もその例外ではない。(工IK)

資本主義の安定化の承認の半面は、一国社会主義の可能性の承認であった。資本主義の安定自体きわめて不安定な、相対的な、短期のものであろうから、その間にできるだけ早くソ連の社会主義建設を進めようという実際の議論だったのである。一国社会主義の反対者は、ソ連における経済建設によってなんらかの前進がなされることは否定しなかったが、その仕事が不確定な性格をもち、それが完了することは不可能だといったにすぎなかったが、これが、否定と懐疑しか提示せず、何かがほかのところで起こるのを待つように提案したにすぎないようにとられたのである。スターリンは1924年当時のソ連のおかれた実際的な状況をつかみ、資本主義の安定に対するロシアの革命家のあせりをどの方向に向けたらよいかをつかんでいたのである。そして第2に、一国社会主義がロシアこそ社会主義への道を開く先導者であるという民族的誇りをロシア人に与えた点にある。すなわち、一国社会主義は、西ヨーロッパからの独立の宣言であり、一国社会主義はたんなる一片の経済分析でもたんなる政策宣言でもなく、ロシア国民の能力と運命にたいする確信の宣言であったのである。…スターリン主義を生んだ原因を考えてみると、第1には、ロシアの後進性があげられる。当時ロシアは、文化は低く、文盲の比率は高く、民主主義的な伝統もなかったのである。第2は、1918～21年の内戦である。内戦の中から生まれ出た指導者層は、何らかの困難に直面すると、軍事的、治安警察的な弾圧によって危機を回避するのに慣れていたのである。第3に、スターリン個人がソ連の支配者になったことである。スターリンの国家観や党に対する考え方もさることながら、強調すべきは彼の個人的性格である。(宮HY)

私はトロツキーが失脚した原因の第一が世界革命論を唱えたことなのかと思っていたが、実際は違うようである。世界革命論が敗れたからトロツキーが失脚したのではなく、ポリシェビキ党内においてトロツキーが受け入れられず、スターリンに失脚させられたことにより世界革命論が敗れたのだということを知った。(専TA)

「トロツキーの言動についての決議」でかつての討論の内容を整理して非難していたが、総会で人が昔やったことをもち出してきてその人を攻撃することを決議するなどということをやっているような国には住みたくない。(専AK)

スターリン体制 2

なぜこれだけの欠点を指摘されるような矛盾を抱えた機構が40年以上の長きにわたって存続しえたのかというと、それは皮肉にも当時のソヴェト連邦の指導者が非常に優秀であり、しかも共産党の独裁体制下において、機構自体が、より良く改善されるための機能を有していなかったことに起因する。…よく歴史学者によって、墮落した民主主義は優れた独裁者に劣るというようなことを言われるが、このことを証明する一例である。(工KT)

非スターリン化は、ソ連内に、爆発的な政治変動や大胆な経済改革を伴ったが、「非スターリン」の対概念としての「スターリン主義」が明確に規定されていず、ある歴史家によると、公式の「非スターリン化」の口火を切ったフルシチョフは「自分が何と闘っ

ているか最後まで理解できなかった」指導者であった。…政治、経済、社会の徹底的民主化の必要は訴えられつつも、スターリン主義なる基本的政治原理は保持されていた。

(教 TM)

異端者が容赦なく弾圧される環境の中で、スターリンの解釈のみが唯一の正しい解釈であると教えこまれた者にとって、共産主義は何と理解されていたのだろうか。彼らは、それを資本主義の矛盾によって知ったのでもなければ、反対者との闘争の中に実践的に体得したのでもなく、ただ宣伝されてきた一つの教えにすぎないのだ。…スターリニズムが共産主義の唯一の正しい解釈だと教えこまれてきた者にとって、スターリンを離れた共産主義を考えるとすることは、心理的に不可能なことになる。スターリンの否定は、高度に組織された、持続性のある、人為的な集団であるソ連の、結合の心理的基礎を破壊したと言えるし、また、スターリンの否定により、共産主義は、以前のような宗教性を失い、共産党は国民の信頼を失って、ソ連は思想的な危機に立ったとすることができる。(宮 KH)

ほとんどことあるごとに、スターリンに出し抜かれてきた英米外交の失敗は、西側における親ソ的世論の高まりを背景にして起きたものである。その多くは、非理性的ではあっても寛大な一時の気分から、また多くが、個人あるいは民衆の罪の意識から出ていた。さらに尊敬しにくい動機が、共産主義者や、その同調者たちを動かしていた。彼らの多くは、個人的な不平不満にとらわれた結果、長年、苦難にあえいでいたロシアの民衆を犠牲にして、サディスティックな衝動に身をまかせることになった。彼らの心理は多くの点でスターリン自身の心理を反映していたのである。(工 TM)

スターリンの戦後体制と芸術の関連を、ショスタコーヴィチという一人の作曲家のたどった運命を通して考察してみたが、政治と芸術がこのような形態でかかわりあうというのは20世紀にはじめて見られたことではないだろう。ただ、それ以前の関係とはかなり異質で、殊にショスタコーヴィチが「作曲家の使命は社会を映し出す曲をわかりやすい形で大衆に呈示すること」というポリシーのもとで作曲活動をしていたが故に、このような長期間に亘る為政者との「敵対」関係を置かねばならなかったのだろう。

(教 KN)

行政システムから個人崇拜批判を除去しただけでは問題は解決されないことが明らかになっている。しかし私は、フルシチョフの個人崇拜批判によって、ソ連は一步前進することができたのだと思う。(宮 MT)

1970年代の後半から1980年代の初頭の状況について、「危機前現象」という言葉がつかわれている。そのままでは「危機」に陥るような現象ということで、経済の停滞と社会的・道徳的な乱れ（たとえばヤミ経済、不労所得稼ぎ、コネによる人事、アルコール依存証などのひろがり）を主に指している。そうして民衆のこれにたいする不満も高まっていて、これが望ましくない方向に動員されるかもしれないという事態であった。

(教 EM)

ソ連の経済の崩壊は、ブレジネフ時代にあるとも言われているが、私もそう考える一人である。ブレジネフ政権は、時代の転換期にありながらも、官僚の高齢化もあり、う

まく時代についていけなかったのだと思う。(経 OT)

ソ連では、中央が絶対で、すべてが「上からの命令」で行なわれていたと思うので、中央にいる人間が、このように私利私欲のために動いてしまって、腐敗していたならば、下にいる（命令に従う）国民も、当然腐敗していってしまうと思う。(工 EM)

アンドロポフ政権は、市場経済の原則をとり入れた価格政策をとり入れた最初の政府でもあった。企業やコルホーズ、ソフホーズの自主性拡大の必要を認める意志ももっていた。これは就任後初の党中央委員会の演説で明らかにしたことである。アンドロポフ政権が何を残したかといえば、結果論だけでみてしまうと、殆ど何も残っていないかもしれない。しかし、当時のソ連の官僚の意識改革への影響は大きく、さすがは秘密警察の長官を15年も務めた人物だといえる。…ソ連が歩んできた道は資本主義への遠まわりに思えてならない。(教 KT)

ソヴェト連邦に加入する過程はそれぞれの国によってかなり異なる。特にバルト3国などは、旧ソ連時代からはげしく独立運動をしていたということが理解できる。(教 SH)

「社会主義共同体」の利益なるものは、アメリカがその侵略の口実とする「自由世界」の利益と同じように、大国エゴイズムの隠れミノにすぎないのではないだろうか。つまり、ソ連は東欧諸国について、制限主権論を適用した兄弟国（というよりか従属国）としてではなく、単なるソ連の国境警備隊としか見ていないのだろう。(教 IT)

たしかに「東西冷戦」そのものの発生をすべてソ連の責任にするのは見当違いなものであるが、少なくともソ連の「裏切られた革命」という面から見れば「社会主義」の当初の目的を失ったものであり、「東西冷戦」のひとつの要因となったことは否定できないのではないかとと思われる。(専 TK)

農業・農民の問題

もしソ連の指導者たちが、1927年に自分たちが敵意ある世界のなかで孤立していると感じなかったならば、工業化のテンポはもっと低かったかもしれない。第2の要因は、しだいに重くなってくる失業の重圧であろう。失業は都市の現象であったが、その主要な源泉は農村の過剰人口であった。(教 YT)

1929年夏と秋を通じて、次第次第に中央における集団化への勢いは増した。しかしその最も熱狂的な推進者によってすら、依然2つのことが想定されていた。第1にたとえどんな圧力を地方当局が農民にかけたとしても集団化は自発的なものであらうと想定された。第2にたとえどんなにこの事業の緊急性が強調されたとしても、これが完了するのに少なくとも数年はかかるだろうと想定されたのである。…突然、ソ連農業全体の強制的かつ即時の集団化にとびこむ決意をした。この決定的変化は、2つの要素によってもたらされたようにみえる。第1は、穀物調達という毎年繰返される悪夢によって醸成された捨てばちの気分であった。コルホーズは生産増大の見込みは別にして、個別農民よりも容易にその穀物を公的機関に引渡すよう強制することができたのである。第2の要因は、工業化の成功と5か年計画の見込みで鼓舞された意気盛んな雰囲気であった。(教 MT)

コルホーズの頂点には議長がいた。議長は、形式的には選挙されることになっていたが、実際には管区官憲によって指名された。そして、最低2年間その任にとどまらねばならないとされていたが、多くの場合もっと頻繁に交替した。こうした慣行に対しては、35年のコルホーズ大会ですでに不満が表明されていたが、その後になってもなくならなかった。総会の権限は、実際面ではきわめて弱く、他のところで行なわれた決定を、それもしばしば受け身に批准するだけに限られていた。(教MA)

ソヴェトの農業政策は農民に対する緊縮と緩和のくり返しであった。その中で明確な事は、緊縮後の緩和の年には生産が増大するということである。気候なども関係し、単純には言えないが、農業は農民の意欲に大いに関係しているということがわかる。…戦争まで見通していたのなら賞賛すべきだろうが、当面の危機回避のための政策であったのなら、非難されてもしょうがないであろう。(経KM)

ソ連という国に限られたことではないが、国に「変化」をひき起こす最も重要な要因の1つは、農民ではないかと思う。いつも一番下の階級に見られる農民だが、国の基本的経済を支えているのは農民だと思う。(専TY)

私は、農の問題を、「世界の都市」としての日本で、しかもその都市で長年くらしてきた者、完全な消費者として生活している人に、もっとよく考えてほしい。多少なりと、農業をやっていくことの苦しさを知る私としては、圧力をうけ続けていた農民の行動を身勝手だとは思えない。(工WK)

ソ連を短期間で「大国」とするために避けがたい政策であったという立場もある。ただ農民の立場からすれば「大国」よりも安定した生活のほうが重要なのではないだろうか。(工KK)

平等主義は、十月革命の結果であると同時に、1920年代まで確固たる存在であった農村の共同体の影響によると思われる。(工WN)

ペレストロイカ

もともとソ連という国は情報の偏りの多い国であった。多民族で構成されている国であるだけに、大量の情報、多くの価値観などが存在していると、分裂をまねきやすくなるのである。社会主義という体制そのものが、相反する価値の双方を受容するだけの器がないのだから、これは仕方のないことなのである。…自由になった言論と報道は、まさに「となりの芝生は青い」風になってしまった。そして免疫のない市民は、その論評に、どっぷりとつかってしまい、その結果今までの悪い面と他国の良い面についてしか見えなくなり、自分たちの良い面をすべて捨ててしまったのである。その結果がこのような混乱であるのなら、グラスノスチとは、ソ連邦(すくなくともゴルバチョフ大統領)にとっては、開けてはならないパンドラの箱であったのかもしれない。(営KY)

昔はソ連で日本のテレビ局などが市民にマイクを向けても市民は何も話さなかった。それが今ではちがいが、日本人が見習わなければならないくらいきちんとした考えをもっている。しかし日本で見るとソ連国内の状態は日本人が同情してしまったり、ときには優越感にひたるような映像ばかりが目だつ。(工SG)

ソビエトのスポーツ選手の表情が以前とくらべものにならないほど豊かで、明るいものとなっている事も私には忘れられない事である。(工 US)

「ペレストロイカ」、「グラスノスチ」は当局の側から出されてきた、いわば上からの民主主義で、文化人、インテリの世界は大騒ぎしているが、庶民の生活には、何の変化もなく「シーン」としている。(教 MY)

最近になって元ゴルバチョフ大統領の別荘などテレビで見たが、やはり全国民が平等なユートピアを目指すものとはとうてい思えない。(工 YH)

比較的恵まれた環境に生きてきたゴルバチョフには、日常生活に市民がどれだけ困窮しているのか、その切実さを真に理解することはできなかったのである。(営 KY)

「二兎を追う者は一兎をも得ず」というように、自由と生活の安定を一遍に求めても無理な話しだ。それは、自由主義の中にいる人が一番わかっているはずだ。自由と生活は反比例していると考ええてくる今日この頃だから。(教 TR)

日本の首相が代々口にする、口先だけの行政改革と違い、ペレストロイカは良くも悪くも「実行された」ということに、大きな功績があるように思う。(工 WT)

「上からの革命」の第2の成功者はスターリンである。彼は暴力的な変革で、国家社会主義体制を完成させ、土台においては農民をコルホーズ制度に緊縛した。そしてマルクス主義を西欧批判の原理として受け取り、ソビエト・ロシア第一主義を鼓吹した。彼の「革命」は自由化なき工業化であり、彼はソ連の地位を世界の超大国にまで高めた。…「上からの革命」がそれを可能にした強力な国家権力を制限する方向へ進むという、ロシア史上かつてない事態が現出したのだ。ゴルバチョフのペレストロイカは、その意味でロシア史の伝統からの決定的脱出となったのだ。(教 IN)

私は、ソ連の状態を聞くたびにいつもバラバラになった鎖を想像する。物資をつんだまま放置された鉄道、品物のないお店、飢えていてもどうすることもできない人々、飢えを横目に利益を得る人々、そして国家がすべてバラバラで一本につながっていない。(教 SK)

ソビエト連邦に限らず、どの国においても言えることだと思うが、国家の体制がまだ安定しておらず、又根本的な改善を必要としている時期にのぞまれる「指導者」とは「若くやわらかく強い」者であると私は考える。若いとは年令的なことを言っているのではなく、物事のあらゆる面に対し関心を持ち、また、理想を抱き、それに向かって進むという精神の若さであり、それは「やわらかさ」にも通じる柔軟性を持つということでもある。強さとは、それに立ち向かう勇気と意志の強さのことである。これに一種のカリスマ性の様なものが加われば、指導者としての条件はかなり満たされているのではないか。…8月政変の後、エリツィンの支持が高まり、ゴルバチョフ勢力の弱まりが感じられたことは、ゴルバチョフが「おさえ」の体制をとっていたのに対し、エリツィンは「闘」の形をとっていることに関係するのではないだろうか。(教 AM)

「国家」という大議論ばかりがあって、「生活をどうするか」という具体性がないのが、ペレストロイカの末期にはっきりしてしまったのが旧ソ連の現実で、現在の現実でもある。(経 OH)

ロシア人社会は、常に最も強固な指導者国家であり、指導者社会であった。ペレストロイカは、ソ連体制の建て直し等というものではなく、ロシア人社会に新しい社会関係を作り上げる事なのである。…ソ連の経済でも、少なくとも一般消費財の生産流通は厳密な計画経済から市民の自由な経済活動に切り替えなければならない。すなわち、この限りにおいて、指導者の経済は大衆の経済に変わっていかなければならない。こうした傾向は、世界的に指導者の時代が大衆の時代に変わりつつある事と密接に関連している。ここで最も難しい問題であると言っているのは、一口で言えば、人間の社会そのものを指導者の時代から脱却せしめ得ないでしかも経済だけを大衆の経済にする事はできるであろうかという疑問である。…いずれにせよ、ペレストロイカの成否は、大衆のあいだから本当の意味のイニシアティブが沸き上がってくるかどうかにかかっているのである。(宮KT)

大衆の要求はロシア革命の勝利で達成されたのであるが、今また、新たな状況のもとで、ロシア革命以来今までの体制を見直し、自由という要求を掲げて民衆が再び立ち上がったということだろう。(専YC)

ペレストロイカを社会主義の枠内においてのみ行おうとしたことに限界があった。(専TT)

この本を読んで私なりに予測するところ、ロシアが安定するようには思えず、さらに混沌としていくと思う。毛沢東的に意見になるが、その混沌の中から何か新しいものが生まれてくるかもしれない。(専FK)

特権層や官僚主義は、ロシア革命の目的に反しており、ロシア革命が間違いであったということではない。(工TT)

ソビエトは、ある意味で「真面目一本槍」の社会である。たとえば、バー、キャバレー、ダンスホール、パチンコ店、ゲームセンターなど、われわれ「レジャー産業」といって思い浮かべるような分野の殆どは、「ブルジョア的」浪費であり、かつ人間をおとしめるものとして拒否されつづけてきた。…やっぱり、良くなろうという気持が大切で、その気持があれば、人間なんとか生きていけると思うのだ。ソ連にごくろう様と言ってあげたい。(教SN)

経済ペレストロイカが今後の環境悪化の主要な要因となる可能性も多分にある。このことは、外国資本の導入において、アメリカ多国籍企業がフィリピンなど東南アジアで展開した「環境植民地主義」とでも称しうるようなことをどうチェックするかということであって、実はソ連のマスコミはそうした心配を表明している。(教OT)

エリツィン大統領が独断で決めた自由価格制度は、過去のネップの失敗の経験を全く生かしておらず、今の旧ソ連の経済は破綻をきたしている。昔の共産党の独裁という強い歯止めのない現在において、新たな革命が起こるのも時間の問題ではないだろうか。(教IN)

ゴルバチョフの登場によって少なくともかつてのようなソ連に対する恐怖心はかなり取り払われたのは否定できない。それどころか、ペレストロイカの進展により、ソ連邦そのものが消滅する事態となり、経済の混乱からくる国民の生活難を我々は少なからず

同情の目で見ているというのが事実だろう。したがって、ソ連邦崩壊によって、以前の恐怖がほとんど消え去った、というのが西側の一致した見方である。だが、私はかねてから抱いていたソ連の膨張主義についての疑問が解決できないでいる。(教 SM)

ゴルバチョフの対外政策の転換に対する疑念は、アフガニスタンからの撤兵によってほぼ一掃され、西側世界は緊張緩和に対するソ連の真剣な意図を信じるに至った。89年末の東欧諸国における共産党支配体制の崩壊に決定的な影響をおよぼしたのは、ゴルバチョフ政権による「ブレジネフ・ドクトリン（制限主権論）」の放棄である。(宮 AH)

ペレストロイカの効果がでてくるのは、これからのソビエト諸共和国次第であり、現在世界が一つにまとまろうとするこの時期、ECのようにソビエト諸共和国がまとまって、新しい社会主義の世の中を平和的に実現することが必要だと思う。(工 ST)

政治に無関心な人が多いほど、平和だというようなことを聞いたことがあります、これも一理あると思います。…今のソ連の人々の政治に対する関心は私や日本人とは、比べものにならないと思います。これには生活の状態の良し悪しの影響がかなりあると思います。(工 JT)

現在地球上には、7000の民族に対し国家は160しかない。長い年月をかけて自然に形成された民族を、国家という人為的、近代的な枠にはめ込むのは難しい。このずれをどう調整して、複数の民族が同一の国家の中で共存できるようにしていくか、それがそれぞれの民族が生き残っていくための鍵である。(教 MY)